

●澤邊裕子 (2010) 「交流学习のカリキュラムデザインと実践」 2010 年度高等学校韓国朝鮮語教育研修大阪大会 (発表場所: 桃谷高等学校)

2008 年度から宮城学院女子大学の高大連携の授業内において韓国語を学ぶ高校生と韓国で日本語を学ぶ高校生の間での交流学习を韓国の先生方と連携・協働して実施してきた。本発表は、そのカリキュラムデザインと実践事例を報告したものである。

[\(PPT資料はこちら\)](#)

●澤邊裕子 (2010) 「韓日学校間交流学习に関する一考察」 韓国日本語学会第 21 回国際学術発表会 (発表場所: 誠信女子大学校)

本稿は韓日学校間における交流学习の活動タイプを明らかにしたうえで、日本語教育と韓国語教育の連携による交流学习の発展性について考察した。実際に実践され公開されている韓日交流活動の事例について稲垣他 (2001) をもとに「交流体験型」「教科学習型」「協働活動型」の 3 つの活動タイプに再分類した。現在行われているものの多くは「交流体験型」である。韓国の中級日本語教師に対する質問紙調査の結果では、韓日交流活動の必要性は感じるが、方法がわからない・相手校がない・時間がない等の理由で実施に至っていないという回答が目立った。また、日本の高校の韓国語教師との情報交換の場 (ホームページ等) があれば活用したいという声が多く寄せられた。この結果は韓日交流活動に対して情報交換の場や実践方法についての情報が得られることが交流学习促進に役立つことを示唆している。

[\(PPT資料\[一部\]はこちら\)](#)

●澤邊裕子 (2009) 「韓国の日本語学習者と日本の韓国語学習者間における協働型学習モデルの構築」 2009 年度日本語教育学会第 7 回研究集会 (関西地区) (発表場所: 日本学生支援機構 大阪日本語教育センター)

本研究の目的は、韓国の高校における日本語学習者と日本の高校における韓国語学習者間で行う協働型学習モデルを提示することである。

本研究ではまず両言語教育の基準となる学習指導要領において共通の指針となっている教育内容と方法「生きたコミュニケーション活動と文化理解」、「学習者志向・学習者参加型の活動」に基づき、2008 年 4 月から 12 月まで交流活動を柱とする日本語／韓国語授業のコース・デザインを行い、授業を実践した。

授業実践後、参加者を対象に行った自由記述型のアンケートとフォローアップインタビューを実施し、グラウンデッド・セオリーを援用してカテゴリー化し、それらの結果から本学習活動の意義を検討した。調査の結果、言語面と文化面において自ら学習を深めようとする意識の変化が見られ、学習動機を高め、交流活動に積極的に関わろうとする態度を形成するなどの学習効果が期待でき、両言語教育の教育目標の達成に有用である可能性が示唆された。本研究で示す協働型学習モデルは同じアジア圏の学習者間における学び合いの意義と可能性の大きさを示すものであり、今後類似した授業実践の手がかりになるものとする。

[\(PPT資料はこちら\)](#)

●澤邊裕子 (2008)「高校における日本語教育のシラバスに関する一考察—学習者のニーズ・関心に配慮した実践的シラバス・デザインを目指して—」韓国日本語学会第17回学術発表会主題講演 (発表場所：建国大学校)

本稿は、韓国的高校における日本語教育のシラバスを「コミュニケーション能力の育成」という観点から再考することを目的とする。韓国では2011年から新しい「2007年改訂教育課程」が施行されることになっており、その改定案が2007年に教育人的資源部から告示された。第7次教育課程に引き続き、新しい教育課程においても「コミュニケーション能力」の育成が目標として掲げられており、機能シラバスが柱となっている。本稿はこうした教育課程のシラバスをもとに、生徒の興味、関心を考慮した実践的シラバス・デザインを行うことを目指し、その第一段階として実際の韓日高校生間の交流の事例を取り上げ、交流場面において必要とされていた言語機能や話題について調査した。その結果、生徒間では自分自身の好みや学校生活のことなどさまざまな話題について情報交換しながらお互いの共通点や相違点を見出そうとしていることがわかった。このことから生徒間では「情報交換」が重要なコミュニケーションとなっていることが示唆されたが、教育課程のシラバスにおいては「情報」の内容までは触れられていない。そのため、実践的シラバスでは生徒が関心を持つさまざまな話題を取り上げ、それらに関する情報交換を通じながら日本語について学び、運用力が身につけられるよう配慮する必要があることを指摘した。

[\(PPT資料\[一部\]はこちら\)](#)

●澤邊裕子・鄭美英 (2007)「日韓高校生交流場面での話題と語彙—意志疎通能力育成を目的とした日本語授業のために—」韓国日本学会 第74回国際学術大会 (発表場所：建国大学校)

本研究では意志疎通能力の育成を目的とした高校の日本語授業において、どのような内容を扱うべきかについて検討するために、韓国と日本の高校生が授業内に行った作文交流場面において交わした話題と語彙について調査した。120の交流履歴を対象として分析した結果、話題は14のカテゴリーに分類され、最も多く展開されていた話題は芸能人、映画、趣味など「好きなもの/人」であることがわかった。さらに使用語彙について、名詞、形容詞、動詞の延べ語数、異なり語数、使用頻度の高い上位10語、日本語能力試験の出題基準における単語の難易度について調査した。名詞に関しては「好きなもの/人」に関して述べるときに芸能人やスポーツ選手の名前などの固有名詞、動詞に関しては「待つ、ある、見る」などの初級レベルの基本的な動詞の他、「感動する、愛する」などの感情を表現するための動詞、形容詞に関しては「好き、うれしい」など感情形容詞が全体の6割近く使用されていることなどが明らかになった。話題と語彙は密接に関わっており、生徒はまず伝えたい話題があってそのあと必要な語彙を探すという思考の流れがあること、さらにそれぞれの話題において生徒たちは自分がどう感じているかという感情を相手に伝えることを大切に考えていることなどがわかった。これらの結果から最後に意志疎通能力を育成する日本語授業のために、項目積み上げ式の教授法から脱却し、「話題ベースのシラバスを作成し、授業で実践すること」と「感情を伝えることを重視した日本語授業を実施すること」の2点を提案し、生徒に身近な話題を取り上げ、その中で自分が感じていることをどう表現するかを学ぶ授業の工夫の必要性を述べた。

(PPT資料[一部]はこちら)

●澤邊裕子（2006）「特技適性の日本語授業における日韓交流の可能性－日韓の高校生を対象として－」
韓国日本語学会,第14回学術発表会（発表場所：東国大学校）

本発表は、日韓の高校生が日本語と韓国語というそれぞれの母語と学習言語を使って文通を行った実践とその成果について、生徒の感想を分析することにより考察したものである。

(PPT資料[一部]はこちら)